

# ちまたで話題の信州の管理釣り場を

## 1泊2日で巡ってみた

文 堀内正徳 (本誌編集部)



「オトナの管理釣り場」特集をやると決めたのはいいものの、正直なところなにか「オトナ」なのか曖昧だった。分からないときは釣りするしかない。

そこで昨今ますます話題になっていく、オトナが集まってるらしい管理釣り場を自分でまわってみることにした。じつは個人的に管理釣り場の釣りは大好きだ(ウキ釣りは苦手)。ワクワクしてきた。

信州蓼科方面にそれらしき管理釣り場が集中しているのは、以前から気になっていた。東京から日帰り圏内だが、

せっかくだから1泊2日のお泊まりで、管理釣り場をめぐる旅とオトナっぽくしゃれこむことにした。

### 槻の池フィッシングエリア(蓼科)

11月初旬、早朝に都内を出てまず最初に、長野県茅野市の(槻の池フィッシングエリア)へ向かった。約三時間のドライブだ。意外と近い。

池の畔に着くと、秋の高原の香りが胸いっぱいひろがった。現地を待ち合わせ

せていた川本勉さん(FLYING代表)はすでにダブルハンドロッドをつないで、来年に出す予定のDVDの撮影をしていた。針葉樹の林をバックにオレンジ色のフライラインがのびる。美しいと素直に思う。重力がコントロールされている。

槻の池管理人の加藤ヒロシさんによると、別荘地内の池を別荘地でのアクティビティの一つとして、釣り場を利用しようと考えたのが約10年前のこと。水質・水温・魚レギュレーション管理など、まったくゼロからのスタートだったそうだ。



(上から) 槻の池フィッシングエリア、フライリゾート蓼科、らんかあポンド (右下) 八千穂レイク



基本的に自分が釣り好きでないと、管理釣り場の管理人は勤まらない。自分が釣り好きだからこそその苦勞もたくさんあることは、すぐに分かる。タフな仕事だ。山形出身の加藤さんは、子供のころから筋金入りの釣り好きだ。山形はいいですね、鳥海月光川の月光ダム下は、深相いいのになぜ釣れないんですかね、などのマニアな質問をして、初対面なのに盛り上がりがあった。

一日券を買ったのに自分が釣りを始めたのは、もう午後になってからだった。川本さんは風切り音が立たない独特のゆつたりしたスベイクヤスティンクで、棧橋から長いラインをのばしている。その先には#10のスタンダード・ドライフライ。以前、風器人名義の本誌連載(風来潮道運)でも語られていた。きちんとブレゼンテーションして魚を出す。釣りが。「この釣り方なら自分が使いたいフライを使えます。ほら」

ふわりとフライをブレゼントし、ほんとに魚を出す。ハッチはないのだが。「魚は水中でフライの落ちてくるのを見えています。大切なのはブレゼンテーションです」

### クロスオーストリッチで入れ食い

私は#5にDTフローティングラインをセットして、この季節の止水に効く、ドライのマドラーミノー#12を結んだ。出なかつたらピクピクさせたり、強く短くジャークして潜らせて誘う。水面が軽く波立っているとさらにいいはず。

…出ない。じゃあ移動だ、移動だ。ブレゼントを繰り返しながら池の周囲を回った。対岸の流れ込みで最初の1匹。ピンシヤンの40cm級ニジマスだった。川本さんがこの魚はすごいと絶賛していた。むかしと比べるとまったく最近の管理釣り場の魚の質は、全般におそろしいほど素晴らしい。

マドラーがよくないので、戻ってきて手前の一番大きい流れ込みの棧橋に陣取った。こういうときはクロスオーストリッチである。

考案者の島崎憲司郎さんが本誌90号で言っていたように、クロスオーストリッチは万能フライではない。だがクロスオーストリッチはその釣り場の状況と魚により、劇的にはまる。そしてまる安定度と確率が抜きん出ている。やはり(簡単に巻けてよく釣れるフライ)なのだ。流れ込みでクロスオーストリッチ#16を20ヤードキャスト。ゆっくり沈めてか

## フローティングラインでクロスオーストリッチ#16を沈めて ゆっくりリトリブ。入れ食いが始まった。

らミミズが這うくらいのスピードでリトリブした。これじゃ鉄板すぎる。案の定入れ食いになった。

いいニジマスがかかったので、50mほど離れた隣の棧橋で釣っていた川本さん同行のM嬢に、「すいません、おれのカメラ持ってきてください」と大声で頼んだ。カメラを持って来てくれたので、ついでにシャッターも押しもらった。すいませぬ。婚姻色の浮かんではれほれするようなニジマスだった。

それから夕方まで、三人でいい釣りをした。おだやかな秋晴れ、木立を肌寒くなる寸前の風が抜ける。ときどきシカの啼く声が遠くに聞こえる。今年福島原発が爆発したなんて信じられないシアワセだ。釣り人ではないから生きていられる。陽がとっぷりと暮れた。でも川本さんが帰らない。「時間ですよ」と何回も言っているのに、「あともうちょっとだけ」と言っていて、一人ですっごくロッドを振っていた。M嬢と顔を見合わせた。オトナですわね。

### ひとりかもねむ

宿は白樺湖畔の伊藤園ホテルグループ、白樺湖ビューホテルにとった。一泊二食

飲み放題で、年中いつでも6800円均一。安い。本当はしっとりした湖畔の旅館などで気取ってみたいが、オトナの事情で伊藤園。

大広間のバイキング会場に行くと、平均年齢65歳のお客様にぎわっていた。伊藤園的な食事をいただいた後、ロビーから自宅へ電話(それもオトナっぽじ)。パパは今日いい釣りをしましたよ。

部屋へ戻ったらやることがない。持ってきた本を読む気も起らない。だいたいは私は旅先へ本をたくさん持っていくせに、読んだ試しがほとんどない。バッグからiPadをとり出して先週のインタビュウの文字起こしを始めた。本誌第38号の特集取材でも、私は巻頭記事で東北の管理釣り場を巡った。あの夜はホテルの部屋で迷わず、オトナのビデオのボタンを押していた。いつのまにオトナになってオトナを卒業したんだろうなあと、仕事をした。

### らんかあポンド(白樺湖畔)

白樺湖畔には、岡谷のプロショップ、らんかあ倶楽部さんが運営する管理釣り場がある。コンビニで聞くとすぐに場所を教えてください。

湖畔を上手で仕切るようにして「らんかあポンド」はあった。午前9時、駐車場から覗くと二人のフライフィッシャーが釣りをしていた。ちょうど魚をかけたところだ。ロッドがぐいぐいのされている。カメラを持って池まで駆け下りた。さっそく声をかけると、伊奈市から来ている20代の爽やかな青年だった。まだフライを始めて1、2年とか。

「こういう釣り雑誌を作っているんです」と自己紹介したら、「じゃあキャストニングを教えてください」と言われた。ひい。誤解されたかもしれない。びびりつつ、青年のロッドを振らせてもらった。東海地方の自称プロフィッシャーのオリジナルロッドだった。いいロッドだがウルトラマニアックなスペックだ。こういうロッドをほぼ初心者最初の一本にすすめるのはどうかと思った。オリジナルのフライラインもいっしょに売られそうになったとか。

タイピングも始めたばかりの青年は、手持ちのフライがあまりないとのこと。大きなお世話かと思いつながら、車から自分のボックスを持ってきて、いくつからフライをあげた。青年は溪流は相当やるもの、止水ではドライかウキ釣りしか経験がないとのこと。

そこで不肖私のヘンテコなユスリカフライを結んで、ウキを外し、リーダーの糸ふけであたりをとる釣り方を教えてあげた。するとなんと幸運か、でかいニジマスが食いついた。青年は「この釣り方面白いです、ウキよりずっといい!」と大喜び。こっちはも興奮した。